

# あちらこちら文学散歩

井本元義

「六」アルチュール・ランボーの故郷

アルチュール・ランボーについては数多の本が出版されている。それらは世界中の若者に愛されその情熱をさらに喚起する。僕もその一人だが、ここではその文学や語り継がれている生活を史実通りに書くことにあまり意味を感じない。孤独な散歩者、僕、が彼の足跡を辿ってさ迷っていた若き日々の思い出を記すことに、幾分感傷的ではあるが、意味を見つけた。普通の本に書かれていないことを、足で探して見つけた時の歓びを記しておきたい。そしてその時々詩を思い浮かべて、感動したことを僕は忘れることはないだろう。これは伝記ではないので順番も何もなく、ただ思いついたとおりに記していきたい。

最初に彼の生まれ故郷シャルルビルを訪れたのはもう三十年も前になる。僕の初めてのフランス旅行の時だった。フランス語もわからず、電車にのるのも初めてだった。チケットを買うのもやっとであったので、何でも「ウイ、ウイ」と言っていた。とにかく買えたと思っていたが、帰国してよく見るとその切符はその気もない一等車だった。また列車にのる時に、プラットホームで各人が器械でガッチャンとしなければならぬのも知らない。途中で検札がきてわけのわからないまま罰金、二万円以上だった、をとられたのに、僕は

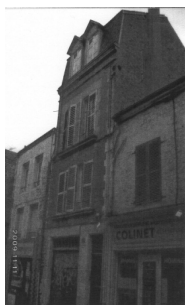
愛想よく車掌に笑い顔を向けていたような気がする。

五月一日だった。駅を出ると傍に大きな桜の木があつて、多分八重桜か、その根元いっぱいピンクの花びらが散っていた。いつも見ている花だが、感動的だった。

地図もないので売店の女性にやっとミュゼ・ランボーはと聞くと大体の方向を教えてくださいました。あとは足で探すのは得意である。静かな町で石造りの家が並んでいる。中心の通りを抜け市役所前を通ってミュゼにたどり着く。その日は鈴蘭祭で、フランス中で誰でもが鈴蘭の小さな花束を売っていいらしい。老人や子供も小さなワゴンで売っている。帰りに一束買って売店の女性にあげようと思いつきながら通り過ぎる。



シャルルビルの町並み



5歳の家

ミュゼは昔の粉ひき小屋、というより工場か立派な石造りの古い建物だった。そこでは僕の知らない写真をたくさん見ることが出来た。十六歳でパリへ出奔し、様々な詩人たちと交流した時、不遜無頼に振る舞った頃、阿片やアブサンに浸りながら他を圧倒する詩を書き続けた頃。彼が愛した妹、母親の写真、手書きの原稿、アフリカでの生活、また展示品は涙が出るほど僕の心を高揚させ引き付けた。彼の愛用のトランクとコーヒーカープ、ナイフ、フォークなど。彼が瀕死の状態でアフリカから帰国し、マルセイユで片足を切断して故郷に戻ってきた時、ずっとそばにあったものだ。そのカップに僕の口をつけ、コーヒーを飲みたい、ナイフで何かを喰いたい、僕は真剣にそう思った。十七歳の頃の等身大

の写真。僕はならんで写真を撮ってもらった。彼に会いたい、彼がいとおしい、僕はしばしの時間に酔った。

受付の女性に、ランボーが「地獄の季節」を書いたという母親の里のロッシュユ村がどこにあるか聞いたが、よく通じない。発音が悪いのが原因だとわかつている。やっとわかったが、そこはここから三十キロ先よ、といわれてあきらめた。

彼が生まれた家、住んでいた家、墓を市内地図で教えてもらう。生まれた家は町の中心にあった。二階か三階に住んでいたらしいが、窓は閉められたまま。誰も住んではないのだろう。壁に白い古いプレートがある。「千八百五十四年 アルチュール・ランボーが生まれた」一階はレストラン。メニューの見方もよく知らず適当に頼んで昼食をとる。そこは何年か後に訪れた時にはCD屋になっていた。「なぜかその時はカミュの自身の声で朗読した(異邦人のCDを買った)五歳になるまでここに住んでいたらしい。シャルルビルでランボー一家は計五回引っ越している。それも狭い範囲である。これらについてはまたあとで述べる。

お墓はそこから十五分くらい歩いた少し坂になったところにあった。当時は人口も少ないから市内の離れになるのだろう。いろんな本で読んだ、彼の葬儀の様子を思い浮かべながら歩く。彼の一番かわいがっていた妹のヴィタリーの墓と並んでいる。枯れた供花が残っている。僕は現実と全く違う空間の静寂の中にいた。僕は何度も白い墓石を撫でた。

彼は千八百九十一年十一月十日午前十時にマルセイユのコンセプシオン病院で死んだ。

詩人としてではない。文学は彼にはもはや何の意味もない。武器商人、ひと財産を作り上げている商人。アビシニアのハラル、無味乾燥な汚わいに満ちた城壁の街で十年以上も土着人と過ごした商人として死ぬ。砂漠を通り抜ける風の音と闇の中で彼は一人、毎日どんな夜を送ったのだろう。遠くから聞こえてくるのはハイエナの遠吠えだけだ。

その年の五月、瀕死の彼はアフリカからマルセイユにたどり着く。五月に片足切断のあ

と七月にロッシュユ村に帰るが再びうわごとのようにアフリカへアフリカへと無理を言う。アフリカをめざし、八月に再びマルセイユへ戻るがそこで苦悶苦痛のうちに死ぬ。付き添いは下の妹のイザベル一人。彼の過去の詩は世間を驚かせる賞賛を受けているが、彼はそのことを知らないし、彼の死を誰も知らない。

十四日に彼の遺体がシャルルビルへ到着する。気丈な母親が墓を準備している。父親と妹の墓の間に場所を作るために作業員に指示する。そして第一級の葬儀を挙げるように神父に依頼する。葬儀は盛大だが母と妹の二人だけが参列する。他は拒否する。母は悲嘆には暮れていたが涙は流さず泰然としていた。葬儀のオルガン曲は「怒りの日」である。三十七歳、書かざる、沈黙の天才詩人の死。

十六歳の彼がいつも通って詩を書いていた好きなカフェのある広場から、墓地へ向かうなだらかな道の両側はプラタナスの並木である。色づいた落ち葉は前日の雨で地面こびりついている。その中を柩車がゆっくり進んでいく。

二十十一年、アルチュール・ランボーの百二十回目の命日に墓参りをした。四回目のシャルルビル訪問だった。パリを出る時は曇りだったが、その日のシャルルビルは小さな冷たい雨が降っていた。傘は持って来なかった。少し惨めだったがそれはちょうど僕の気持ちに合っていた。ミュゼ・ランボーの職員は僕の顔を覚えてくれたが、今日はランボーの命日なのでなにかセレモニーでもありますか、と訊ねると不思議な顔をして本を出して来て調べて、ああそうね、と言うだけだった。そして何もセレモニーはないよ。街の人通りは少ない。テラスのカフェもテーブルや椅子が濡れていて客もいない。なだらかな墓地への道をとぼとぼ歩く。両側の並木のプラタナスの葉は落ちてしまつて濡れた道路に汚く張り付いている。百二十年まえの葬儀もこんな天気だったのだろう。雨はまだやまない。墓地には誰もいない。ただ、誰かが捧げた菊の花束が三束、墓石の上に雨に打たれている。

だけだった。

今までの訪問時には気がつかなかったが、墓地の入り口の近くにポストがあった。数多いランバルジャンのためだろうか、彼への手紙をどうぞ、と書いてあるようだ。僕は迷わず名刺を入れた。

僕は駅前のお店でなぜか折りたたみナイフを買ってバリへ戻った。

### 「七」シャルルビルのランボー一家

アルチュールの母親は敬虔なクリスチャンであり、またかなり気の強い他人には専制的な女性だった。強い義務感、儉約家、厳格な服装、痩せてはいるが誇り高い女性であった。少年アルチュールは何度も平手打ちを喰らい、母親に反抗し出奔した。しかし愛と憎しみは同居している。ランボー家は代々シャルルビルから三十キロほど離れたロッシュユ村の農場主で、母親の父、アルチュールの祖父が、娘も年頃だし、ちよつとしゃれた生活でもしようと思ひ、別荘に住むようにこの街に出てきた。農繁期には村へ帰ればよい。

ナポレオン街十二番地、先に述べたアパルトマンで生まれる。父は陸軍大尉フレデリック・ランボー四十歳である。駅前の公園に今でもある音楽堂、滅多にない娯楽の夕べ、二人は出会ったということだった。この家で父母、兄一人妹二人、計五人、祖父まで入れると六人、で五歳半まで暮らす。すぐに死んだ妹がいるが、毎年出産していることになる。

二軒目はブルボン街七十三番地。彼は六歳ちよつと前。あまりに家族が増えるので家主が引越しを要求する。ここは労働者が多い下層階級地区で、通りの先は製釘工場や鞣革工場があったらしい。悪臭も漂い衛生的にも劣悪な地域だ。

最初の家から市役所の方に少し行き、路地を左に曲がる。その距離は三百メートルにもならない。取りあえずということだったようだが、父親はいやがりまた夫婦仲も次第に悪

くなり、この家を最後に父は姿を消す。彼はデイジョンに住み再び家族とは会わない。

母親から叱られながら、アルチュールはその辺りの貧しい子供たちといつも遊んでいる。「七歳の詩人たち」という十六歳の時の詩に、「彼は組み伏せられながらその娘のお尻に嘔みついた。なぜならその娘はズロースなどはいたことはなかったから」というのがある。僕は、これはこのあたりの労働者の娘と喧嘩して押さえつけられて嘔みついた思い出ではなからうかと思っている。

今はきれいな通りになっている。両側にブチックなどの店が並び、昔の工場跡は図書館やホールになっている。何軒かは古い建物が残っているが、残念ながらこの番地は立て替わっている。ただ残っている建物から想像することが出来る。昔のまま住んでいるところはない。僕は一番近い七十何番地かの古い家、誰も住んでいない、を写真にとつてこの家だと勝手に決めた。ここから小学校に通う。ここでは家族は二年しか住んでいない。

三軒目は、クール・ドレルアン街一三番地。マロニエ並木の通りにある。生家を真中にしてブルボン街の反対側で瀟洒なアパルトマンだった。隣の要塞都市メジエールへ続く大通りだ。ここにも三年しか住んでいない。アルチュールの十一歳までだ。人が今でも住んでいる。

嬉しいことに、一階は「レストラン・ランボー」である。そこで食事をしない手はない。店の表にも中にもアルチュールの顔が大きく描かれている。アルデンヌ風スパゲッティを頼む。ムール貝が沢山入っている。「ここはアルデンヌ県、もう少し行くとベルギー、海もそんなに遠くはないが海辺の町ではない。」

丁度その命日の日。ウエイトレスに、今日はアルチュール・ランボーの命日だね、と訊ねたが、そう知らないわ、という返事。それでも僕は満足だった。表の通りのテーブルに座ったが、わざわざ作られたテント風の屋根の下だ。何もない方がよかるうにと思ったが、随分後になってその理由がわかった。マロニエの実が落ちて来るのだ。頭でも直撃さ

れたら怪我をする。皿に落ちたらまず割れる。

四軒目は随分探したがわからぬ。フォレスト街二十番地。それもそのはず、今の住所表示と違っている。ミュゼの人に調べてもらってやっとわかる。しかも二、三軒の家の並んだ空き地がその番地になっている。この間、彼は高等中学に通う。読書に没る。詩を書く。また毎週日曜日には母親に連れられて兄弟妹は一行に並んで教会へ通う。教会まではゆつくり歩いて十分。厳しいしつくと、芽生えるさらなる反抗心。学校では教師たちは彼の才能に少しづつ気づく。いくつも賞を貰う。将来仲たがいする兄とはまた仲良しである。ここからは駅まで歩いてても一直線で五分とかからない。駅のそばには「ユニヴェル」というホテルがあり一階はカフェがある。このカフェによく彼は座っていた、とミュゼの人が教えてくれたが、この頃のことかまたあとのことかはわからない。このカフェの名前は後でパリからの手紙にも出てくる。十五歳になるかならない少年であるが、汽車の汽笛を聞きながら、もうすでに彼はパリへの憧れを持ち始めていたに違いない。彼は詩を書きためている。僕もそこに座ってしばし時間を費やした。ホテルは営業していなかった。一度はその隣のホテルに泊まったことがある。小さなホテルだった。受付にはアルチュール・ランボーの写真が掛けてあった。

五軒目はマドレーヌ河岸五番地。生家から市役所前広場を抜けると市内を流れるきれいなムーズ川岸にでる。生家から一キロメートルもない。ここがランボー一家のシャルルビルでの最後の家になる。今のミュゼの前にある。アルチュール十五歳。千八百六十九年、ボードレルがなくなつた頃だ。彼はボードレルにもかなりの影響を受ける。そしてここで彼の才能が一気に噴き出し、波乱万丈の出発点になる。よき師に出会い、よき親友に出会う。度重なるパリへの出奔、連れ戻され、母親に平手打ちを喰らい、また出奔。無賃乗車、徒歩での帰還、独仏戦争の敗北。パリコンミュンへの参加、だがすぐに逃亡しシャルルビルに戻る。このあたりは膨大な数の書物に書かれている。

ポケットにはいつも紙切れと鉛筆が入っている。次々に書きなぐられる詩。彼の吐く息は、そのまま色であり言葉であり詩である。何物が彼の肉体と精神を貫き、その口からこのきらびやかな原色を吐き出させたのか。彼はただなされるがままに、怒り喜び哄笑し、感じたままの言葉を詩にして咆哮する。

成長した彼にもう出奔という言葉は当てはまらない。波乱の放浪が始まるが、時々帰って来るのはこの家である。結局ここには二十一歳まで住むことになる。

この家は数年前から記念館になっているが、建物と部屋があるだけで中身は何もない。結構広い。彼と同じ階段を上り下りする、部屋に佇む、それだけでも満足である。彼の息遣いを想像する。ただ係員に聞いてもどこが彼の部屋だったかとかはわからない。

市役所前広場は周りがアーケードになっている。そこにかつて「デュテルム」というテラスカフェがあった。終日そこに座って詩を書いている。十六歳の彼はビールを飲み、煙草をくゆらす。学校にはもう行かない。同級生に会っても侮蔑の眼差しを投げかけるだけだ。日が暮れると書きかけの原稿を抱えて家へ帰る。徒歩で数分である。僕もその道をたどってみる。前を歩く少年はもしかして彼ではないか。いや僕自身がその分身ではないか。家では夜を徹して推敲する。出来上がった詩をパリの大御所、テオドル・バンビル、へ送ったりする。

僕はそのカフェを探したが、百五十年も昔のカフェだ、あるわけではない。同じようなカフェを見つけてそこを勝手に「デュテルム」と決める。終日とはいかないまでも僕もそこに座ってビールを飲む。数行のフレーズを書いてみる。

彼の最高傑作のひとつ「酔いどれ船」はここで書かれたに違いない。百行にわたるアレキサンドラン、完璧な韻、美しい言葉、十六歳の少年が書いたとは思われない雄大な構想。パリコンミュン崩壊のあと彼はその詩をヴェルレーヌに送る。感激したヴェルレーヌから「来たれパリへ、偉大なる魂よ」と返事を貰う。もうなにを迷うこともない。即、パリ

へ出発だ。



15歳から21歳までの家



デュカル広場

※上記の家と、この広場を往復しながら「酔いどれ船」を書いた。ランボー16歳

それからの四年間が、若きアルチュールの情熱のもつとも輝く時であり、最も美しい青春の墮落であり、激しい文学への爆発の日々である。ヴェルレーヌとの出会い、友情、愛憎、諍い、傷害事件、別れ、「地獄の季節」の出版など。アブサンと阿片、泥酔と錯乱、他人への侮蔑、パリ、ベルギー、イギリス、放浪、ヴェルレーヌと競って書きなぐる詩の数々。何という感動がわれわれランバルジャン「ランボー愛好者たち」の胸を突き上げ、我々を悩ませときめかせ、時には絶望へ追い落とし、また希望を持たせ、旅への憧れを抱かせ、文学への情熱を怒りや悲しみにまで昇華させたことだろう。これらの日々はいくら書いても書きたりない。数々の逸話は少しずつ述べていくことにする。

この家を最後に一家はシャルルビルを引き払いロッシユ村へ戻る。千八百七十五年、アルチュールは二十一歳になつたばかりだった。大きな引き金になつたのは、この家での愛する妹ヴェイタリーの死だった。

ブリュッセルでのピストル事件、酔ったヴェルレーヌがランボーを撃つ、その後、傷の癒えたアルチュールはロッシユ村へ帰り納屋にこもり、雄叫びやうめき声をあげながら、短期間のうちに「地獄の季節」を書き上げる。しかし出版してそれを何人かへ送ると、刑務所にいるヴェルレーヌにも、もう興味は半減する。

彼はすでに凛々しい青年である。僕はこの時期が彼の人生の大きな転回点であると考えている。彼は体の中で唸り続けていたマグマのような情熱が、この時いきなり巨大な暗黒の深淵に変貌したのを見たのだ。

このマドレーヌ街の最後の家に佇み、窓からムーズ川の流れを眼にすると、彼の苦悩が突き上げて来て、僕は激しい感動を抑えることが出来なかった。

僕の拙作「ロッシユ村幻影 仮説アルチュール・ランボー」のこの場面を少し抜粋する。「その年の秋からずっと妹ヴェイタリーはシャルルビルの家で床に就いていた。全身の骨が息をする度に壊れていくようだと言っていた頃はまだよかつた。・・・静かな恐怖の痛みであつた。つややかだつた栗色の髪は抜け落ちてナイトキャップからわずかに覗いている。頬と唇は痩せて土塊のようだった。ただアルチュールに似ている青い瞳だけが不安の余りさらに美しくなつていた。彼は家族の中で彼女が一番好きだつた。ヴェイタリーもそうだった。」

ヴェイタリーは余命がもう少ないと知らなかつた。アルチュールは何もできないのに苛立つていた。そしてその瞬間を怖れ、力を失くしていた。

「十二月になると雨と曇の日々が続いた。マドレーヌ河岸の家で彼は何日も部屋にこもつていた。なにも考えることができず頭は空白のままだった。かつてはこの部屋でどれほどたくさんの詩を書いたことだろう。記憶だけはあがるが、その時の感情のきらめきや高ぶりや、頭の緊張や快さは全く思い出せない。時間の流れは速かつた。

雨が止んでふと陽射しが差し込んできた日、彼はヴェイタリーの部屋に入った。彼女は窓

辺に立って外を見ていた。道を挟んでムーズ川が流れている。すっかり落葉してしまっている森の木々は僅かの陽に映えていた。空の青がムーズ川の流れにきらめいている。駄目だよ、風邪をひくよ、と彼は手を取って座らせた。窓を閉めても彼女はまだ外を見ている（だけど今日は本当にきれいですもの、ムーズ川が。このままお日様がいてくれたらいいのに。今年はクリスマスミサのミサには行けるかしら。）

もう何年も教会へは足を向けたことがない。しかしヴィタリーの具合がよければその時は自分が抱いてでもミサに行こう。昔はよくヴィタリーを抱き上げたものだった。冬の寒い朝、よちよち歩きの彼女は寝巻のまま俺のベッドに飛び込んできたものだった。そして俺に抱かれるのが好きだった。暖めてやるとまた眠った。アルにいちちゃん、アルにいちちゃん、とまめらない口でいつも俺を呼んだ。

（昨年はアルチュールにいさんのおかげでロンドンにもパリにも行っただし、大きな教会の礼拝も出来た。パリは素敵だったわ、駅はこの何倍も大きくて、百貨店はきれいだっただ。何も買えなかつたけれど、お母さんから叱られるから言えなかつたけれど、欲しいものが沢山あった。街の人はみんなおしゃべりで、地下鉄も面白かった。ロンドンの夏は暑かつたけれど、あの時公園で食べたアイスクリームの美味しかったこと。始めて見る海もきれいだつた。あの真っ赤な朝焼けは今でも目から離れない・・・。）

翌日からヴィタリーは熱を出した。一週間も熱にうなされて死んだ。人形のような小さな美しい死に化粧だつた。組み合わされた指は蝋燭のように細く白く冷たかつた。アルチュールは慟哭した。

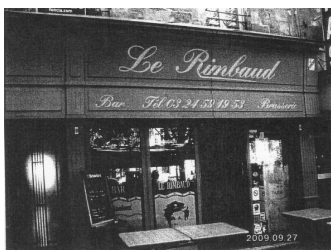
それがどの部屋だつたのかわからない。ムーズ川の見える部屋と会話とアルチュールの悲しみは僕の想像だ。彼はしばらく偏疼痛に悩まされる。そして頭を丸刈りにする。詩が文学が、いったいなんだつたのか。今思うと俺のあのころの情熱は何という虚しい空疎な

ものだつたか。この悲しみは何をもって癒されるのか。

ほんの二年前、パリの下町のホテルで「ファウスト」を読んだことが思い出される。詩のためなら、魂でも何でも売ったやるさと、粹がついていたことを。俺は本当に魂を売ってしまった。薄汚れた虚無という言葉に。心の中の薄っぺらな惨めな破れた紙屑のような虚無に。

「翌年そうそうに一家はシャルルビルを引き払いロッシュ村へもどる。彼の本当の虚しい放浪が始まる。彼は外人部隊に入隊する。船が出る。彼が向かうのは東洋の果てのジャングルである。不思議な木々や不気味な獣、そして原色の人食い巨花の密集するジャングルの闇である。現実の闇だ。現実の無だ。」

続く



レストラン・ランボー

